

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530679

研究課題名(和文) 授業構想力を開発するエピソード・カンファレンスに関する  
臨床教育学的研究研究課題名(英文) Clinical-pedagogical research on the “episode conference” which  
empower the teacher’s competences for lesson studies

研究代表者

庄井 良信 (SHOY YOSHINOBU)

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00206260

研究成果の概要(和文)：

エピソード・カンファレンスの多面的な職能開発機能が、参与観察を通じたエピソード記録と参加者の語りに基づいて、臨床的に解明された。確かめられたのは、子ども理解に基づくエピソード・カンファレンスは、授業の構想力・実践力・省察力を包括的に涵養するということである。また、このカンファレンスは、現職教師の生涯に亘る学びを支援するための大学院水準の教育カリキュラムとして有意義であることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：

The multiple positive functions of the episode conference are clinically elucidated by analyzing a large amount of episode-data in continuous participatory observations and by narrative-data of a lot of participants who had been engaged in this joint research. It is clarified that the episode conference which was focusing on understanding the life of a child should cultivate the teacher’s competencies for lesson studies in a holistic perspective. It is also made clear that this sort of episode conference had a significant meaning for the teacher’s curriculum development to support their life-long learning.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：臨床教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：エピソード・カンファレンス、臨床教育学、教師教育、授業研究

## 1. 研究開始当初の背景

高度専門職大学院(教職大学院)の発足、教員免許更新制度の政策的導入等、我が国における現職教師教育改革は、一つの重要な歴

史的転換点を迎えていた。

当時、内外の教育系大学・大学院では、現代的諸課題に応じるために、教員の養成・採用・研修システムの総合的な見直しが進められていた。その多くは、現職教師の自己学習

カリキュラム開発と不可分に進められようとしていた。これらは、それぞれの固有なライフステージにおける現職教師の「理論と実践との高次の融合」をめざす教育学の諸研究とも密接に関連していた。

研究開始当初まで、日本教育学会の特別課題研究をはじめ、日本の教育界では、教員の養成カリキュラム改革に関わる諸課題が検討されてきた。しかし、現職教員のリカレント（生涯学習）と接続した現職教師教育改革のカリキュラムに関する研究は、必ずしも十分に展開されていたとは言えない。また、現職教師教育の制度に関わる諸研究はいくつか生まれているが、その臨床的・実践的カリキュラム開発やその教育学的検討は、まだ十分に深められているわけではなかった。

一方、社会・文化状況の急激な変化に伴い、社会が要請する現職教師教育へのニーズも、複雑に多様化してきていた。こうした複雑な状況変化に柔軟に対応する現職教員の高度な臨床的実践力の開発方法の研究は、今日、もっとも焦眉の課題の一つになっていた。

調査者は、これまで、不登校、虐待・暴力、軽度発達障害のある児童生徒への発達援助の思想と方法を、具体的な教育実践のエピソード記述に基づいて考察する臨床教育学の方法を構想してきていた。調査者の勤務校である北海道教育大学における教職10年目経験者研修や、大学院教育における臨床生徒指導特論・演習では、福祉・医療・教育という多分野を領域横断しあう多声的カンファレンスの運営技量の育成や、学校教育分野での具体的な臨床事例に基づく問題解決能力育成の在り方も考察しつづけていた。

学術研究活動として、調査者は、1999年から2001年まで、日本教育学会の課題研究委員会の一つであった「臨床教育学の動向と課題」の運営事務局を担当し、臨床教育学の視点から、現代社会における教職の専門性を問い直していた。（『臨床教育学序説』柏書房、2002年、共著）。学校教師の高度職能開発については、2002～2005年まで、日本教育学会における特別課題研究委員会「教師教育の再編動向と教育学の課題」の構成員として参加しつつ、日本学術振興会の科学研究費補助金の支援を受けた共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の運営事務局を担当し、理論と実践とを融合する修士論文指導の課題について考察していた。（『創造現場の臨床教育学』明石書店、2008年、共編著）。

国際的には、フィンランドにおけるコミュニティを基盤にした現職教師教育カリキュラムの思想と方法の検討も行ってきた（『フィンランドに学ぶ学力と教育』明石書店、2004年、共編著）。研究開始当初は、日本教育学会特別課題研究委員会「現職教師教育カリキュラムの教育学的検討」の運営事務局も

担当していた。以上のような、臨床研究、理論研究、国際的政策研究を背景に、調査者は、現職教師の高度な教職能力開発プログラムの根幹をなすカリキュラムの一つとしてエピソード・カンファレンスのさらなる臨床的・理論的考察が必要であると考えていた。

## 2. 研究の目的

本調査・研究の目的は、現職教員の高度教職実践力を涵養するための教育方法の一つとして申請者が独自に開拓してきたエピソード・カンファレンスに潜在する職能開発的意義（特に教師の高度な授業構想力の開発にもたらす教育的意義）を、継続的なケース記録と、その体験者への半構造化面接記録に基づいて、臨床教育学の視点から理論化することである。そのことを通して、今日、まさに喫緊の課題である「理論と実践とをより高い次元で融合する現職教師教育カリキュラムの臨床的開発」に貢献したいと考えている。

学術的には、教師の職能開発の問題を、個体主義的能力の次元から同業種・異業種の関係性や、それらの活動システム構築能力の次元にまで拡張する、文化・歴史的活動理論の方法論を、そのナラティブ位相へと拡張する理論的基盤の開拓が期待される。

また、＜制度的次元＞からの高度な教職能力開発の研究だけでなく、＜臨床的次元＞からの教職能力開発に関する理論の構築は、内外を問わず、きわめて独創性の高い、しかも、今日もっとも社会的要請の強い研究課題の一つになることが期待される。

さらに、研究成果としては、第一に、エピソード・カンファレンスを基軸にした教育学研究者と現場教師（実践者）との相互支援システム（教職能力エンパワメント）の綱領が浮き彫りになることが期待される。これは、教育系大学院における現職教師のリカレントや教職・専門職大学院における高度職能開発プログラムの構想にも大きく貢献できるものになると考えられる。

## 3. 研究の方法

以上の目的を達成するため、本調査・研究期間（3年間）では、三つの方法を適用した。

(1). 一つは、エピソード・カンファレンスを応用した授業研究協力校（札幌市、広島市、北海道檜山上ノ国町の公立小学校）への継続的なフィールドワークの実施と、そこから得られた臨床的・実践的データに基づく職能開発要因の抽出という方法である。

具体的には、学校教育現場へ出張し、事前

のカンファレンス—実践—事後のカンファレンスまで、一貫して当該の授業構想に参画し、そのプロセスを画像・音声データとして記録した。札幌の公立小学校へは延べ12回、北海道檜山ノ国町の公立小学校へは、延べ6回、広島市の公立小学校へは、延べ3回、臨床参画型の実地調査を実施した。これらの基礎データに基づいて、子どもの発達に最近接領域（ZPD）を多角的に理解するための直感力（子ども理解力）と、それに相応しい授業を創造的に想像する構想力（授業構想力）の涵養に影響を及ぼす諸要因を分析しつづけた。

(2). もう一つは、延べ128名の現職教員（小学校・中学校・高等学校）を対象に、2つの領域（発達支援と学習支援）で蓄積してきたカンファレンス記録（画像データ）と、当事者への聴きとり記録（音声データ）をテキスト文書に変換し、それらを臨床教育学の視点から理論化・概念化するという方法である。その理論的な研究枠組みを整理するために、職能開発における質的研究の教育学的展開に関する国内研究資料収集を行った。

(3). 最後は、フィンランド・オウル大学の教師教育学部で展開されているナラティブな学び（narrative learning）と、本邦のエピソード・カンファレンスとの学術研究交流を通して、国際的な共同研究を推進し、職能開発（特に授業構想力の開発）におけるエピソード・カンファレンスの教育的意義を理論的に解明するという方法である。

その際、国際的な教師の高度職能開発研究における位置づけを明確にするために、フィンランド・オウル大学教師教育学部大学院博士課程（カヤーニ校）との国際的な共同研究を推進するために、スカイプを活用した国際テレビ会議も、延べ8回実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1). 文化歴史的活動理論（CHAT理論）のナラティブな展開と教師教育改革

学術的な研究成果としては、教師の職能開発の問題を、個体主義的能力の次元から同業種・異業種の多角的関係性や、それらの活動システム構築能力の次元にまで拡張する、文化・歴史的活動理論（cultural-historical activity theory）の方法論とそのナラティブ位相への拡張をより具体化することができた。

この成果については、2011年9月にイタリアのローマで開催される国際学会：ISCAR（The International Society for Cultural and Activity Research）のシンポジウムにおいて、申請者は、“Narrative learning in an inner-city public school: Analyzing the

clinical and interventional research data by “multi-voiced episode conference” for teacher education”というテーマで研究成果発表を行う予定である。

このような研究成果の発表と国際的な学術研究交流を通して、1990年代以降、国際的にも展開しているヴィゴツキー・ルネサンスの潮流の一つの主要な方法論を、活動理論の視界から、しかもナラティブな位相を包摂して対象化する領域横断的な共同研究のさらなる展開が期待できる。

##### (2). 教師の高度職能開発カリキュラム開発

臨床的実践研究の成果としては、第一に、エピソード・カンファレンスを基軸にした教育学研究者と現場教師（実践者）との相互支援システム（教職能力の心理的・社会的エンバウメント）の綱領が浮き彫りになった。

これは、教員養成系大学院における現職教師や、教職大学院における高度職能開発プログラムの構想にも貢献できるものとなった。その成果の一部は、日本臨床教育学会及び北海道臨床教育学会という学術研究団体の設立において、一つの基本的な綱領の重要な課題として位置づけられ、今後の継続的な研究活動の基盤となった。

教師の高度な職能開発カリキュラム開発という次元からの研究成果の第二は、現職教師の「子ども理解力」、「授業構想力」、「学級経営力」の開発という今日的課題や、その展開の新たな糸口をあきらかにすることができた。

具体的には、学校教育において緊急性の高い危機への参画場面（学級崩壊や授業不成立や、被虐待経験のある児童・生徒や不登校児童・生徒事例への危機介入など）や、日常支援のエピソードとその臨床教育学理論化の方略が、その思想の深化とともに、教育学に固有なく臨床知として再構築されていくための土台が構築された。これも、2011年の1月から3月に相次いで設立された臨床教育学系の全国学会及び地域学会の活動という制度的基盤としても結実している。

##### (3). 臨床教育学の国際的研究基盤の構築

臨床教育学は、一回性の教育事象から子ども理解の直観力を深め、それに基づく発達援助の構想力を高めることを目指している。これらの力量は、今日、学校の教師に求められる最も基本的な（ある意味で基幹的な）力量のひとつである。教育内容や教材に詳しいだけでも、教育技法や教授法が巧みなだけでも、質の高い教育実践（発達援助実践）にはならない。

新しい時代にふさわしい教師の高度で専門的な力量を高めるために、「子ども理解」を基軸としたエピソード・カンファレンスが

教師教育にとって極めて重要な意義を持つことが確かめられた。

この実践の特徴は、ある固有な自己物語 (self-narrative) を生きている子どもの生活世界を、複数の教師が集い (必要に応じて地域の発達援助者の専門家たちにも参加してもらい)、それぞれの専門性を尊重し合いつつ語り合い、考え合い、ある子どもに最もふさわしいケアと発達援助 (指導) の可能性について構想し合うところにある。

たとえば、子どもが抱える心的外傷が深ければ深いほど、それが学校の教師や地域の援助者たちに気づかれにくいことがある。身近な大人から「虐待」を受け、心に深い傷を負っている子どものなかには、確かに大人に怯える子どももいるが、しばしば、笑顔を絶やさず元気な子どももいる。授業における明るく元気な自己表現・表出が、過剰適応の演技 (深層演技) だったことに、カンファレンスの後に気づかされる場合もあった。

いま多くの学校では、不登校の子どもや、登校への不安の強い子どもを、どう理解し、支援したらよいかということが、一つの重要な問いになっている。また、いじめや暴力事件の当事者 (加害者や被害者) である子どもを、どう理解し、支援・指導していくべきなのかということも、日常的に問われている。さらには、学習障害 (LD)、注意欠陥・多動性障害 (AD/HD)、高機能自閉症やアスペルガー障害など、いわゆる「特別なニーズをもつ子ども」たちへの理解と支援・指導の在り方も、問いなおされようとしている。

臨床教育学は、まず、具体的な教育の場と触れ合い、響き合いながら、それをみずからの身体で感じてみることを重視する。生きた教育実践に触れ、何よりも自分の心と身体で感じた世界を大切に、そこに自分なりの「問い」を抱くことから、授業という場における教育学の探求が始まる。

このように、いま臨床教育学は、隣接する臨床系諸学問と理論的関心を共有しながら、一回性の教育的出来事に関する当事者の声や逸話 (episode) に基づいて、子どもの人間発達援助に関する包括的で臨床的な理論と方法を探究している。そのことを通して、臨床教育学は、子ども理解の直観力の深さからケアと発達援助の構想力の豊かさへと開いていくユニークな知の枠組みを開拓しつつあることも明らかになった。

学校のなかで子どもが生活する時間の多くは、教室の授業である。授業で、教えることが巧みな教師は、子ども理解の直観力も鋭く、一人ひとりの子どもの生活概念・生活感情に触れる学びを、科学的概念の対話的・共同的な探求へと媒介していく指導性の重要さを熟知していることも知られている。「学び」と臨床教育学、あるいは「授業」と臨床

教育学という研究領域もまた、これからますます重要な教育学の研究テーマとなるべきであるということも明らかになった。

この研究は、心理臨床分野の応用科学としてではなく、教育学固有の位相から内発的に発展してきた「臨床教育学」の構築に大きく貢献できた。また、従来のように、制度的次元からの高度な教職能力開発の研究だけでなく、臨床的次元からの教職能力開発に関する理論の構築も実現できた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

① 庄井良信・内田雅志・正武家重治ほか 4 名、「臨床教育学におけるナラティブ・アプローチ: 大学院教育カリキュラム改善の試み」『臨床教育学の構想』第 1 号 (北海道教育大学大学院臨床教育学研究室), 2011 年, 1-25, 査読無。

② 庄井良信「教育方法としてのケアの理論と実践」日本教育方法学会『研究集会報告書』(巨大都市下の子どものケアと教育方法学) 第 14 号, 2010 年, 4-13, 査読無。

③ 庄井良信「リサーチを基盤に臨床的な実践構想力を磨く」『学校臨床心理学研究』北海道教育大学大学院研究紀要, 第 7 号, 2010 年, 1-4, 査読無。

④ 庄井良信「現職教員の高度実践構想力開発プログラム」『学校臨床心理学研究』北海道教育大学大学院研究紀要, 第 6 号, 2009 年, 56-68, 査読無。

⑤ 庄井良信「『物語る言葉』の詩学へ: フィンランドの言語教育から何を学ぶのか」『作文と教育』日本作文の会, 第 755 号, 2009 年, 32-39, 査読無。

⑥ 庄井良信「『ケア』しあう関係性と生活指導の未来: 他者の人生に慈しみ深く寄り添うということ」『生活指導』全国生活指導研究協議会, 51 巻 11 号, 42-49, 2009 年, 査読無。

[学会発表] (計 8 件)

① Yoshinobu Shoy, “Narrative learning in an inner-city public school: Analyzing the clinical and interventional research data by “multi-voiced episode conference” for teacher education” In the symposium no.389. ISCAR: International Society for Cultural and Activity Research. It will be held in Rome, 08/09/2011. [発表受理及びプ

プログラム掲載済み]。

②庄井良信「世界における臨床教育学の動向」日本臨床教育学会設立記念集会，武庫川女子大学，2011年3月19日。

③庄井良信「北海道における臨床教育学：その歩みと未来展望」北海道臨床教育学会設立記念集会基調講演，札幌サンプラザホール，2011年1月29日。

④庄井良信「教育方法としてのケアの理論と実践」日本教育方法学会シンポジウム，東京大学，2010年3月13日。

⑤庄井良信「現職教師教育カリキュラム改革の試み：協働（コラボレーション）の二つの基軸と高度実践構想力」日本教育学会・特別課題研究委員会，2009年12月6日。

⑥庄井良信「『自己物語』の共同創造から高度実践構想力へ：教師の専門性の捉え直しと教師教育改革」福井大学国際フォーラム，福井大学，2009年10月24日。

⑦庄井良信“Charting the agenda on our novel educational research in Japan: Clinical research of education”，臨床教育学研究会主催国際シンポジウム，東京・学士会館，2008年11月11日。

⑧庄井良信「研究をベースにした現職教育における教師の『自己物語』の再構築：大学院・学校臨床心理専攻修士（現職教員）への聴きとり調査データから」北海道教育大学教育力推進プロジェクト公開シンポジウム，北海道教育大学，2008年11月9日。

〔図書〕（計3件）

①庄井良信「学校と臨床教育学」汐見稔幸・伊東毅ほか編著『よくわかる教育原理』2011年，319ページ。

②庄井良信「エンパワメント」，「セルフヘルプグループ」竹内常一ほか編著『生活指導事典—生活指導・対人援助に関わる人のために』エイデル研究所，2010年，319ページ。

③庄井良信『創造現場の臨床教育学：教師像の問い直しと教師教育の改革のために』明石書店，2008年，446ページ。

## 6. 研究組織

### (1). 研究代表者

庄井 良信 (SHOY YOSHINOBU)  
北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号：00206260